

皆静かにめしを食べている

ああ、僕は だめな男だ。
絶望、絶望。

京太と兄貴の言い合いには
僕は、ほとんど、耳を傾けていなかった。

そう思いながら、部屋に戻る。

英会話が終わったのが八時半。

それを小包にして、返事の手紙を書こうとすると、
インクびんが、ふとんの上にこぼれた。

あわてて拭いたが もう遅い。
ばつちり、黒い大河が ふとんに 走った。

もう 取り返しが つかない。

明日は、おばあちゃん 驚くだろうなあ。

兄貴と京太の口論で夕食が 遅れた。

おばあちゃんが 夕食用意できたと呼ぶ。

下に降りると、皆、静かにめしを食べている。

僕も黙って食べて、また 上に戻る。

全部 済んだら、今、九時半、もう眠い、これで寝りたい。

布団の真っ黒な大河を見て困ったが、

それよりも、兄貴と京太の口論も気になった。

うとうとしながら、僕は戦争と平和について考えた。